

(2) 主要雑草の特性と防除のポイント

多年生雑草は塊茎などさまざまな繁殖器官で増え、それぞれ表1に示した特性があるので、それに合わせた防除を行う必要がある。以下、主な一年生雑草及び多年生雑草の特性と防除法を示す。なお、オモダカ、クログワイ、コウキヤガラは特に防除が難しいので次の項に記載する。

ノビエ

種子繁殖する一年生雑草で、イネに最も害を及ぼす雑草のひとつである。水田にのみ発生するタイヌビエ、暖地で主に見られるヒメタイヌビエ、畑でも発生するイヌビエを総称してノビエとしている。発生のピークは移植後1～3週間。深水状態で発生が抑制されるが、ひたひた水や落水状態で発生が促されるため、発生量の多いほ場では、中干し期間中に畝間や畦畔際に発生する。イネよりも早く出穂し始め、成熟した種から脱粒する。

コナギ

種子繁殖する一年生雑草で、イネに最も害を及ぼす雑草のひとつである。発生のピークは移植後2～4週間。嫌気的条件下で発芽するため、落水状態では発芽しにくく、深水状態で発生しやすくなる。7月頃から開花を始め、結実する。通常、初中期一発剤で防除できるが、除草剤の成分に抵抗性をもつ個体が残存する場合がある。その場合は、ペンタキサゾン、プレチラクロール、ベンゾピシクロン等の成分が含まれる除草剤によって防除する(詳細は[本章のALS阻害剤に抵抗性を示す雑草の防除の項](#)を参照)。

アゼナ

種子繁殖する一年生雑草。発生のピークは水稲の移植後1～3週間。深水状態で発生が抑制されるが、ひたひた水や落水状態で発生が促されるため、発生量の多いほ場では、中干し期間中に発生が助長される傾向にある。通常、初中期一発剤で防除できるが、除草剤の成分に抵抗性をもつ個体が残存する場合がある。その場合は、プレチラクロール、カフェンストロール、ペンタキサゾン等の成分が含まれる除草剤によって防除する(詳細は[本章のALS阻害剤に抵抗性を示す雑草の防除の項](#)を参照)。

ホタルイ

繁殖は越冬株と種子で行われるが、主に種子で繁殖する。種子には休眠性があり発生消長は比較的だらだらしている。防除はホタルイに有効な初期除草剤の散布が効果的である。

ウリカワ

主な繁殖器官は塊茎である。塊茎には休眠がないため多年生雑草の中では発生が揃いやすいが、低温条件では不揃いとなる。塊茎の形成は出芽後50日前後経過すると始まる。早期栽培では落水が不十分だと稲刈り後も増殖が進み塊茎を形成する。防除はウリカワに有効な初期剤と中期剤の組み合わせ処理を基本とする。発生量によっては一発処理剤の一回散布で防除が可能である。

ウリカワは発生深度が浅いため反転耕により深く埋没すれば、発生は著しく抑えられる。

ミズガヤツリ

塊茎は4月中旬から5月上旬に出芽し始める。代かき時に塊茎をよく埋没させることにより発生量を減らすことができる。塊茎の休眠はほとんどなく、他の多年生雑草に比べ発生が揃いやすい。発生が比較的揃いやすいので有効な初期剤又は一発処理剤での防除が可能である。初期剤又は一発処理剤による防除で効果が見られない場合には、バサグラン液剤・粒剤で防除する。

稲刈り後の秋季防除や早期の耕うんは翌年の発生量を減らすのに効果的である。

表 1 主な多年生雑草の繁殖器官の諸特性

繁殖器官		休眠性の有無		栄養繁殖器官		
栄養繁殖器官	種子	栄養繁殖器官	種子	形成深度	発生深度	形成時期(始期～盛期～終期)
マツバイ 根茎	有(繁殖性大)	無	?	0～3cm	0～3cm (多くは1～2cm)	9月下旬～10月下旬
ミズガヤツリ 塊茎、株基部	有(繁殖性有)	無	無	0～15cm	0～20cm (乾田) 3～5cm (湿潤) 0～1cm (湛水)	8月下旬～10月上旬～11月上旬
クログワイ 塊茎、株基部	有(繁殖性不明)	有(極深)	?	0～20cm	0～20cm	9月下旬～10月中旬～11月中旬
ホタルイ 株基部	有(繁殖性大)	無	有(深)	—	種子 0～1cm 株基部 0～20cm	種子 8月中旬～10月中旬
ウリカワ 塊茎	有	無	?	0～10cm	0～10cm (ほとんど5cm まで)	発生後 50～60 日より長期にわたる。
オモダカ 塊茎	有	有(深)	有(深)	0～30cm	0～30cm	9月下旬～10月上・中旬～11月上・中旬
ヘラオモダカ 株基部	有(繁殖性大)	無	有	—	種子 0～1cm	6月下旬より開花 7月中・下旬より結実、落下する。
ヒルムシロ 鱗茎	有	有	有	0～20cm	0～20cm	9月下旬～10月下旬
セリ 株基部、匍匐茎	有	無	?	—	—	—
コウキヤガラ 塊茎、株基部	有(繁殖性有)	有	有	0～15cm	0～15cm	6月下旬～8月下旬

注) 繁殖器官で下段は主な繁殖器官